

莊子イソップ物語

< 胡蝶の夢 > (齊物論篇)

昔者、莊周夢に胡蝶となる	春の日の真昼時、莊子うとノ、まどろんだ
栩栩然として胡蝶なり	いつの間にやら、花から花へと舞い飛ぶ蝶に
自ら喩（楽）しみて志に適う	ひらノ、ひらり。あゝ愉快だ。自由自在だ
周（莊子）たるを知らざるなり	今は蝶。かつて莊子たるを忘れたり
俄然として覺むれば、	突然目が覺めた
則ち虚虚然として周なり	「何だ、夢だったか」
知らず、周の夢に胡蝶となるか、	あれ？俺が夢を見て蝶になったのかな
胡蝶の夢に周となるかを	それとも蝶の俺が莊子になっているのか？
周と胡蝶とは、則ち必ず分あり	莊子と蝶には自ずから分限（相違）がある
これをこれ物化という	物の変化（実態）とはこんなものなのかも

< 大鵬の志 > (逍遙遊篇)

昔、北の端に大きな海があって、鯢（こん）というそれはそれは大きな魚がいた。その鯢がどうしたことが、一朝にして大化けして大鵬という鳥になった。大きいのってなんのって、背中の長さだけでも何千里あるか分からぬほどだった。台風がくればそれに乗じてさっと一翼して南の端の大池に飛んでいってしまう。ある人の話では、大鵬は飛び上がる時に海上を滑走するのだが、三千里も波立ち、大空高く舞い上がる事九万里。その後六ヶ月飛び続けて一休みするのだという。それを見ていた蝉と鳩があざ笑って言うには、「おやノ、馬鹿な奴もいるもんだ。我々は一生懸命飛び上がったところで、せいぜい榆の木などの小枝に止まるのがやっと。あの大鵬は、なんでわざわざ九万里もの上空に上がって南方を目指していくんだろう。」と。

【莊子の評】「小知は大知に及ばず」と。「朝菌という虫は朝だけしか生きていないので一日というものを知らないし、夏蝉は春秋を知り得ないのだから無理も無いが」と。

燕雀安（いづく）んぞ鴻鵠の志を知らんや（「史記・陳勝世家」）

秦の圧政に反逆の烽火をあげ、後に楚王となる陳勝が日雇い人夫の時、仲間に豪語した言葉。「莊子・逍遙遊篇」にあるこの大鵬の話が語源。

< 利のために己を忘れる > (山木篇)

莊子がある時禁じられた御園で遊んでおった。その時一羽の奇妙な体のカササギが南の方から飛んできた翼の幅は七尺以上、目の大きさはたやゴルフボール並み。それがさっと額をかすめて飛んでいき、栗林のとある枝にとまった。ありゃ何という鳥だろう。いやに図体が大きく態度がでかい。莊子は近寄り、弾弓を引き絞って射落とそうとした。と、その時、ふと目が木陰に気持ちよく安らぐ蟬に釘付けになった。葉陰に潜む蟪蛄がそれを食わんと狙っているのを目撃したからだ。さらに視界を広げてみたら、なんと例のカササギが蟪蛄を狙っている。そこで弓の手を緩めて考えた。あの大鳥だって自分の獲物に夢中だろう。「あゝ、もと／＼物はすべて皆、互いに自分の利得に目がくらみ、狙われていることさえ気がつかない。そして不思議に利害は呼び合うものだ。ぞっとせずにはおられない」。やにわに莊子は弾弓を投げ捨て、逃げようとした。残念どっこい庭番が莊子を捕らえて厳しく詮議した。

< 莊子濮水に釣す > (秋水篇)

莊子が濮水で釣をしていた。するとそこに楚王の使いがやってきて言った。使徒「楚王があなたを召抱え、国内の政治をお任せしたい、というのだがどうか」莊子「聞いた話じゃが、楚の国では、神亀がおって、死後すでに三千年たっているそう。楚王はそれを絹に巻いた箱に収めて、廟堂に大切に保管しておられるとか。この亀は、殺されて甲羅を残して大切にされることを願ったであろうか。あるいは、生き長らえて泥の中で尾をひきずっているのを望んだであろうか。いかがかな」使徒「そりゃあ、やっぱり生き長らえて泥の中で尾をひきずっているのを望んだでしょう」莊子「そうですね。ではお帰りなさい。わしも泥の中で自由に尾をひきずっていたい」

< 練実以外は食わず > (秋水篇)

梁の国に恵子という宰相がいた。莊子が彼に会うために梁にやってきた。或る人が恵子に「莊子が貴方に代わって宰相の地位を狙っている」と言うので、不安に思った恵子は国中を探ること三日三晩に及んだ。莊子が出向いて面会して言うことには、「貴方は南方に鸞雛(えんすう)という鳳凰の雛がいるのをご存知か。この鳥は南海を飛って北海に向かって飛んでいる。鳳凰の雛だけのことはあって、梧桐(あおぎり)の木以外は止まらないし、練実(竹の実)以外は食わないし、甘露の泉水以外は飲まない。ある時上空を飛んでいたら、腐った鼠をしとめた鳶が鸞雛を見て盗られまいかと恐れて「カッ!」と威したという。貴方も梁国の地位を盗られまいかと私を威すつもりですか」と。

古人云えるあり。＜衣を千仞の岡に振り、足を万里の流れに濯う。大丈夫、此の気節無かるべからず。海濶(広)くして魚の躍るに従い、天空しくして鳥の飛ぶに任す。大丈夫、此の度量無かるべからず。＞と。

＜真実の相対性＞（齊物論）

私と君が言い争っているとしよう。君が勝てば私の負け、私が勝てば君が負ける訳だが、果たして勝った方が是で、負けた方が非なのだろうか。真実か否かの絶対的判定者がいないのだから判定できない。仮に第三者がそこに現れて、君の主張に同調したり、又は逆に私に加担したとしよう。それとても単に「第三者」というもう一人がどちらかと意見を同じくしただけのこと。君と私の考えが同じでかつ第三者が賛成した場合も同様だ。皆が同じ意見だっただけの話。要するに、何が真実で、正義とは何かという問題は、相対的なもので、その是非は永遠に判定できない。

＜坐忘＞（太宗師篇）

顔回「先生、私は進境がありました」

孔子「どういうことかね」

顔回「私は仁義ということを忘れてしまいました」

孔子「そうか、でもまだまだ十分とはいえない」

（しばらく経って）

顔回「先生、また、私は進境がありました」

孔子「どういうことかね」

顔回「私は礼樂ということを忘れまして」

孔子「そうか、でもまだまだ十分とはいえない」

（しばらく経って）

顔回「先生、また、私は進境がありました」

孔子「どういうことかね」

顔回「私は坐忘できるようになりました」

孔子「なんだ、その坐忘というのは」

顔回「はい、手足・体の存在を忘れ、耳目の働きからくる聡明を追いやり、形を離れた大通（自然の働き）と一体化することができたのです。」

孔子「なるほど、一体化すれば、相対的な好き嫌いはなくなるし、変化すれば融通無碍だ。お前はやっぱり賢い。わしもお前に従おう」

< 美妾と醜妾 > (山木篇)

陽子が宋国にいて、ある旅籠に泊まった。旅籠の主人には二人の妾がいた。一人は別嬪で、もう一人は醜くかった。ところが醜いほうが可愛がられ、美人の方が粗末に扱われていた。不思議に思った陽子は主人に尋ねた。主人曰く、美人の方は、自分が美人だと鼻にかけておる。だから、わしには美人に見えない。醜女は、自分の醜いことを知っている。だからわしの目には醜く映らない。これを聞いた陽子は、弟子たちに言った。君達よ、今の話を聞いたか。優れた行いをしながらも、自分が優れていると思う心を捨て去ったら、どこへ行っても愛されないということはないのだ。

< 盗人にも五分の理 > (胠篋篇)

大泥棒の盗跖の子分が盗跖に尋ねた。

子分「お頭、泥棒にも道德ってのはありやすか」

盗跖「どんなことにだって道がないということがあろうか。

家のなかの財物をカンで見当をつけるのを「聖」といい

目当ての処に真っ先に踏み込むのを「勇」といい

引き上げるときしんがり役を引き受けるのを「義」といい

うまくいくかとか財物の可否を見分けるのを「知」といい

獲物を公平に分けるのを「仁」というのだ。

この五つの徳を身に付けずに大泥棒になれたためしはないのだ。

子分「・・・・・・・・」

< 井の中の蛙大海を知らず > (秋水篇)

ある時、古井戸に住む蛙が、東海に住む海亀に向かって自慢げに言った。

蛙「俺の生活は実に楽しい。外では井桁の上で跳ね回り、中では欠けた瓦で一休み。

水の中では両脇を浸して顔だけ出して、泥に足をつっこんではぴょんぴょんだ。

海老ガニやおたまじゃくし、ぼうふらどもにゃあ俺の真似などとてもとてもさ。

井戸中の水を占領して、我がもの顔で振舞える楽しさはこれまた最高の楽しみだ。

あんたも一寸遊びにおいで。」

そこで海亀はやってきて、井戸の中に入ろうとして左足を入れようとしたが、すぐに右膝がつっかえるありさま。閉口して後ずさりすると、こう言った。

亀「僕の住んでる東海の海は、千里どころの広さじゃない。深さだって千尋以上さ。

禹王がまだ堯帝のもとで治水に腐心しているころは、十年に九度も大洪水があっ

た。それでも水が増えたわけじゃない。又、湯王の時には八年に七度も日照りが

あった。それでも水が減りもしなかった。このように、時の経過の長短によらず、水量の多少によって増減することもないというのが、東海に住む楽しみだよ。」
その話を聞いた古井戸の蛙は度肝を抜かれて「適適然として驚き、規規然として自失せり」と。

< 蟬取りの名人 >

孔子の一行が楚の国に行く途中、蟬取りのせむしの爺さんに出会った。もち竿で蟬を捕まえるのだが、その上手さときたら、落とし物を拾うようだ。孔子はつくづく感心し、爺さんに聞いた。「上手いもんだ。秘訣はあるのか」と。爺さん曰く、あるともさ、と。まず蟬を捕まえる時期がくると、竿の先に丸（たま）を二つ重ねてみるのじゃ。それが落ちないようになれば、まあ仕損じは少なくて済む。三つ重ねて落ちなければ、仕損じは十にひとつ。五つ重ねて落ちなければ、物を拾う感覚で蟬が取れるようになる。身体の構えは、こうして切り株のようにしっかり固定し、肘の使いようは、枯れ木の枝のようにコトリともしない。天地の広さにも万物の多さにも気を回さない。ただ蟬の羽にだけ一点集中し、みじろぎ一つしない。どんな物とも蟬の羽を引き換えにしないくらいの心構えがあれば、仕損じることなどありゃしない。

孔子それを聞くと感心して弟子たちに言った。心を用いることが専一であれば、精神が集中する。このせむし爺さんがそれだろう、と。

< 蝸牛角上の争い >（則陽篇）

齊の威王と道家の戴氏の対話

戴「王様は蝸牛（かたつむり）をご存知でしょうな」

王「知ってるとも」

戴「その蝸牛の左角に国を持つ王様がいて触氏といい、右角に国を持つ王様を蛮氏といいました。それがあつた時領土争いが起きましてな。戦争勃発ですわ。死体は数万を数え、逃げる者を追ふこと十五日間もかかって、ようやく軍を引き返すというありさまだつたそうです。」

王「おいおい、そんな馬鹿げた虚言を何でまた」

戴「虚言？とんでもござらん。では、王様は我々の住むこの宇宙に際限（はてし）があるとお思いか」

王「それは、際限（はてし）がないさ」

戴「なれば、心を無窮の世界に遊ばす者にしてみれば、人の行き来する地上の国など、とるにたらぬちっぽけなものじゃないですか。触氏といい、蛮氏といい蝸牛角上の国と、王様の国とさした相違があるとも思えませんが」

王「いやいや、その通りだ」

「酒に対す」 白楽天

蝸牛角上 何事をか争う
石火光中 此の身を寄す
富に従い、貧に従い且つ歡樂す
口を開いて笑わざるは 是れ痴人

<進むに敢えて前とならず> (山木篇)

東海に鳥あり。其の名を意怠(いい)という。この鳥はのんびり群れ集い、まるで能無しのようにであった。他の鳥に引っ張られてやっと飛び上がり、脅されて漸く巢に戻るといふありさま。進む時も自分から先頭に立とうとはせず、退く時もしんがりになろうとはしない。餌を食べる時も真っ先に食べることはなく、いつでも食い残しを食べる。こんなわけで鳥の仲間外れに成ることも無く、したがって外部の人間もこの鳥に危害を加えることができない。それだからこそ、いつも災難にあわずにすむのである。

<木鶏(ぼくけい)> (達生篇)

紀渚子という闘鶏調教師が王様のために鶏を飼いならしておった。
預けて十日、せっかちな王様が拝見にこられた。
王「どうだ、未だ仕上がらんか」
紀「まだでございます。空威張りして気を恃むところがあります」

それから又十日経ってこられて
王「どうだ、未だか」
紀「まだでございます。相手の声や姿を見てそれに応じて疾視します」

又十日経って伺われ訊ねた。
王「どうだ、未だか」
紀「もう殆ど宜しゅうございます。相手が鳴いても平然としています。
遠くから見ますとまるで木作りの鶏のようです。その徳全し、です。
他の鶏で向かっていこうとするものはなく、かえって逃げていってしまいます」

六九連勝した双葉山座右の銘が「木鶏」だった。「虚心・無我なれば敵なし」

<麗姫の涙>（齊物論篇）

晉の国君の妃であった麗姫（りき）という美人は、辺鄙な村の防人の娘だった。晉の王様が見初めて都に連れて行こうとしたら、娘は涙で襟がビッシヨリになるほど泣き悲しんだ。ところがどうだ。妃になって、豪奢な宮殿で王様と褥を共にし、美味しいご馳走をたらふく食べるようになってから、あの時泣いたことを後悔したということだ。

生きたい／＼と願っていた者が、死んでからそう思ったことを後悔する場合もある。夢の中で酒を飲んで喜んでいた者が、朝になって泣き悲しみ、夢に泣き悲しんだ者が、朝になって楽しく狩りに出かけることもある。大悟して始めて人生は夢なるを知るものだ。

<日計して足らず、歳計して余りあり>（庚桑楚篇）

老子の弟子に庚桑楚という者がいた。老子の教えの一部をマスターしていた。選ばれて北方の畏壘という山間部を統治するにあたり次の策を用いた。

- 1．臣下の中で頭のいい理論家をやめさせ
- 2．召使いの中で目立った慈善家は遠ざけ
- 3．理屈をいわないおおやうな人物を挙げ
- 4．でたらめで不精者を小間使いに起用した。

三年もすると、畏壘の人々の生活が大いに富んだ。民衆は噂しあった。「彼が来た時は実際これでいけるか怪しんだ。ところが今では、日計すれば勘定は不足するのに、どういう訳か一年の集計ではちゃんと余りがでる。こりゃあきつと聖人だ」と。

民衆はありがたや、ありがたやと言うわけで社稷の神と一緒に祭ろうと言い出した。それを聞いた庚桑楚は、大きくため息をついて弟子に言った。「わしもまだ／＼だ。民衆の目につくようでは師匠（老子）の教えに達していない」と。

因みに老子の教えとは「善行は轍迹（てっせき）無し」{第二七章}

= 真の善行には何の轍迹（わだちの跡）も残らない。

「海舟座談」に九十九翁曰く

殿様{勝海舟}によばれて、何しに来たかと問われたので、「日本一の知恵者の顔を見たいので」というと、「誰が俺を日本一の知恵者と言ったか」といわれる。「世間の人皆申します」というと勝様は歎息して「それなら俺は日本一の知恵者ではない。日本一の知恵者なら、世間の者には分からぬはずじゃ。我が智恵を人の前に隠すことが出来ぬようでは、俺は二流の人物じゃ」と言われた。

< 桁外れの片輪者 > (人間世篇)

昔、支離疏というひどいせむし男がいた。顎は臍のあたり、両肩が頭の高さより高く内臓が頭の上にきていて両股はわき腹に当たる程。これが器用で、裁縫上手で脱穀技術は大変得意だった。お上で兵士を徴集しても不具者故兵役の義務はないし土木工事に人夫を徴発しても仕事の割り当てはない。それでいて、お上からの義米はちゃんといただける。あまりに人並みでないから世間のいじめにあわない。心のありようも支離疏のように片輪にしたらどうだろう。

< 知る者は言わず > (知北遊篇)

「知」が北遊して「無為謂」に出会った。そして次のことを問うた。

1. 何を思い、何を考えたら道を知ることができるか
2. どんな境地に身を置き、何を行えば道に安んずることができるか
3. 何に従い、何によれば道を体得できるか

「知」は三度同じ事を質問したが「無為謂」は答なかった。いや答えることが出来なかった。次に「知」は、山に登って「狂屈」に同じ質問を聞いてみた。「狂屈」は、分かったと言って、話そうとした途中で言いたい事を忘れてしまった。

今度は、宮廷に帰り、徳高き聖人「黄帝」に面会して質問した。皇帝は言った。

1. 何も思わず、何も考えなければ道を知ることができる
2. 一定の境地に身を置かず、一定のことを行わなければ道に安んずることができる
3. 特定のものに従わず、特定のことに寄りかからなければ道を体得できる

「知」は「じゃあ私達は彼ら以上に道を知ったのですね」と謂うと黄帝曰く
いや、何も言わなかった「無為謂」が一番、「狂屈」はそれに近い。わしとおぬしは道にちかづくことさえ無理だ。老子が言ったじゃないか。「知る者は言わず、言う者は知らず」と。又「不言の教えを行う」(老子第二章)と。

(「莊子」森三樹三郎訳、中公文庫参考)

< 至人の心を用うる事鏡の如し >

不将不迎 応而不蔵

至人の心を用うる事鏡の如し。将(送)らず迎えず、応じて蔵せず。
故に能く物に勝(た)えて傷(損な)わず。

<物と春を為す>（徳充符篇）

魯の哀公が孔子に聞いた。衛の国に哀駘它という男がいる。そいつはこれ以上醜男はいないだろうと思えるくらい醜男なんだが、彼と一度逢った男は彼と離れることができず、女衆は他のどんな男の嫁になるよりも、哀駘它の妾になりたいと父母にせがむほどなんだそうだ。別にとりたてた才もなく、他人に同調しているだけだという。勿論君主のような権力もなく、大財産がある訳でもない。

そこで彼をよんで、実際逢ってみたらそれはびっくりするほどの醜男だった。だが、いつのまにかその人となりに惹かれ、一年たらずのうちにすっかり信用するようになった。丁度宰相がいなかった時なので、彼に国政を任せることにした。しびしび受けるような受けないような素振りをしているうちに、私のもとから去って行ってしまったのだ。そしたらどうだ、私自身何か大切なものを失ってしまったようで、おちつかない。一体かれは何ものなのか。と。

孔子曰く、「彼は才全き人間」なのでしょう。豚でさえ生きている母親は寄って行きますが死骸の母親には寄り付きません。子が母親を慕うのはその外形でなく、外形を動かしている心を愛しているからです。我々人間には死生、存亡、困窮・栄達、貧富、賢愚、毀誉褒貶、飢渴、寒暑等々わずらいがいっぱいあります。しかしそれらは力んでみても我々の力ではどうすることも出来ない自然のはからいです。逆らわずに運命を自分に調和させ、それに遊ぶ即ち「物と春を為す」のが哀駘它です。誰もが惹かれる訳です。これが「才全し」ということなのです、と。（かなり独断的訳）

<知や涯無し>（養生主篇）

吾が生や涯有り、而して知や涯無し。涯有るを以て涯無きに随うは殆（あやう）きのみ。

<大を用うるに拙なり>（逍遙遊篇）

宋人に代々の家業として、あかぎれ防止薬を製造販売している者がいた。ある時、一人の旅人がそれを聞きつけて、製造法を百金で買いたいと言って来た。薬屋の男は親族を集めて相談した。

「いい話じゃないか。こんな薬を細々売ったところで五、六金。技術を売れば百金だ」親族の者は皆な賛成し、これを譲ることにした。

旅人は、その作り方をマスターするや呉王のもとに赴いて、あかぎれ薬を売り込んだ。これを冬の水上戦に使えばいい、と。やがてまもなく越との戦争が勃発した。

呉王はこの男を将軍にとりたて、水上戦であかぎれに悩む越軍を大いにうち破った。

< 多岐亡羊 >

「列子」・説符篇に、次の話が載っている。< 学者の楊子の隣家で羊が逃げた。岐路（分かれ道）が多くて人手が足りないというので楊子の下僕を貸した。帰ってきた隣人に羊は捕まったかと聞くとダメだったという。楊子「どうしてか」隣人「岐路の中に又岐路あり。吾ゆくところを知らず。故に帰れり」と。それを聞いて楊子は考え込んだ。弟子の一人が楊子の黙り込んだ理由を悟った。「大道は多岐を以て羊を亡い、学者は多方を以て生を失う」と>。あまり多岐にわたる道が多いために羊を失う。学問も多方（枝葉末節の説）に惑わされると生（本筋・根本）を失ってしまう。

< 亡羊 >（駢拇篇）

二人の男が羊の番をしていて羊を逃した。理由を訊いたら zou は書物を読んで勉強していたと答え、koku は博打をして遊んでいたと答えた。羊を逃がした点は同じだ。

< 寿陵の余子 >（秋水篇）

寿陵の余子（田舎者の若者）が国都の邯鄲で学んだ古事。都ぶりのスマートな歩き方も身につかぬ上、自己本来の歩き方さえ忘れてしまい、腹ばって故郷に帰ったと。

< 以心伝心 >（「列子」・黄帝第二）

海辺に住む男で、かもめの好きな者がいた。
毎日浜辺で、かもめと遊びたわむれていた。
寄って来るかもめの数は百羽以上あった。
父親がそれを知って、鷗と戯れているそうだが、
飼って遊びたいので、捕まえてほしいといった。
男は翌日いつもの浜辺に行った。が、
かもめは舞い上がったまま降りてこなかった。

以心伝心というか、鷗の本能が下心を嗅いだのだ。

< 朝三暮四 >（齊物論篇）

宋の国にサル使いの親方がいて、手飼いのサルにトチの実を与えるのに、朝は三、暮に四としたところサルたちから少ないと抗議が入った。そこで朝に四、暮に三としたら大いに喜んだという話。（どこかにありそうな話だ。）

< 無用の用 > (外物篇)

「貴方の議論は、極めて無用なことばかりだ」と莊子を批評した男がいた。莊子が答えて曰く、「無用なればこそ、有用であるという場合がある。例えば、地面を例にとってみよう。人間が立つためには、両足の分のみ土地があればいい。」

男「その通りだ。両足の分以外の土地は、人間が立つためという意味においては無用だ。」。莊子「ところで、両足の分以外の廻りを、みんな掘り下げて棄却したとしよう。それでも両足分の土地が有用といえるだろうか。」。男「その土地は有効とは言えまい。」。莊子「「そうだとすれば、無用なものが実は有用なものを有用たらしめているといえないだろうか」。男「……」。

< 渾沌(カオス) > (応帝王篇)

南海の帝を syuku といい、北海の帝を kotu といい、中央の帝を渾沌 (konton) という。あるとき syuku と kotu とが、渾沌の住む土地で出会った。渾沌はこの二人を手厚くもてなした。喜んだ syuku と kotu がその厚意に報いんとして相談した。「人間の体には皆七つの穴(目、耳、鼻、口のこと)があって、これで見たり、聞いたり、食ったり、息をしたりしている。ところが渾沌にはそれがない。どうだろう、彼にも穴を開けてあげたら」と。そこで二人は毎日一つずつ、渾沌の体に穴を開けていったが、七日目になると渾沌は死んでしまった。

< 莊子の妻の死 > (至楽篇)

莊子の妻が死んだ。恵子が弔いにいくと、莊子が両足を投げ出して盆(ほとぎ)を打って歌っていた。恵子「貴兄は奥さんと暮らし、子どもを育てゝ年をとるまで一緒だった。奥さんが亡くなられて泣かぬのはまゝよしとしても、盆を打って歌うなぞは不謹慎に過ぎないか。」。莊子「そうではない。妻が死んだ当初はわしだって胸がつまった。だが、よく考えてみると、人間はもと／＼生のないところから出てきた。否、生だけではない、形すらなかった。否、否、形の元になる気さえなかった。そのはじめ、天地が混沌の状態にあったとき、全てのものが交じり合っていたのが変化して気が生じ、気が変化して形ができ、そして形が変化して生命が生じた。今、また変じて死に向かう。これは春夏秋冬の四季の循環を繰り返すのとなんら変わりがない。しかも、妻は天地という巨大な部屋に安らかに眠っている。もしわしが大声を張り上げてわめき散らすようでは、天命を悟らぬことになる。だから泣くのはやめたのだ」。